



山本能楽堂
物語



1.	山本能楽堂.....	2
2.	山本博之と観衛會舞台.....	3
2-1.	山本博之のおいたち.....	3
2-2.	能楽師・山本博之誕生.....	5
2-3.	「観衛會舞台」建設.....	7
3.	「観衛會舞台」時代と太平洋戦争.....	8
3-1.	「観衛會舞台」時代.....	8
3-2.	太平洋戦争中、能楽師としての活動.....	10
3-3.	大阪大空襲.....	11
4.	山本能楽堂再建.....	14
4-1.	波多野家に身を寄せる.....	14
4-2.	「山本能楽堂」建設.....	15
4-3.	能楽師・山本博之.....	19
5.	終わりに.....	21
6.	引用・参考資料.....	22

1. 山本能楽堂

大阪、谷町筋を西に少し折れたところに徳井町という町がある。

熊野街道が貫き、東は谷町三丁目、西は松屋町筋を挟んで東横堀川・本町橋に挟まれた地域で、かつて太閤秀吉によって築かれた大坂城の武家屋敷の町割に、江戸時代になって伏見の町人が移住し賑わいを見せた。現在も、オフィス街として多くの人が行き交う。

その一角に、ひっそりとまるで杜のように佇んでいる木造三階建の能楽堂がある。

足早に歩いていけば、うっかり通り過ぎてしまうほどだ。

ところが、扉を開けると周りの喧騒からは想像できないような空間が広がっている。

建物自体の精緻な構造と、そのなかに収まっているとは信じがたいほどの重量感を備えた檜皮の屋根の厳かな能楽堂に、初めて訪れた人は驚きを隠せない。

舞台は創設以来、長い年月の間に磨かれ、黒光りし、どっしりとした迫力をみなぎらせ、能面の第一人者である松野奏風による鏡板の松が根を下ろし、舞台下には新しく作られる舞台ではほとんどみられることがなくなった伝統的な音響効果としての甕（かめ）が並ぶ。

1927（昭和2年）、山本博之によって創設された山本能楽堂だ。

当時、大阪は「大大阪」と呼ばれ、人口は首都を凌いで日本最大、あらゆる産業が栄え、華やかで活気にあふれた時代で、謡曲を嗜む人も多く山本能楽堂は「文化的な社交場」として大勢の人々が能楽を通じて交流を深めた。

惜しくも1945（昭和20）年3月13日夜、太平洋戦争末期の大阪大空襲により、すべてが焼失してしまったが、焦土と化した大阪で「もう一度谷町に能楽堂をつくりたい」という船場の旦那衆や市民の熱意によって、1950（昭和25）年に再建される。

支援者には松下幸之助や田村駒治郎、武智鉄二らが名を連ねた。

2006（平成18）年12月、「市街地にある三階建の木造建築で、伝統的な能舞台を持つ能楽堂として貴重」として文化審議会により登録有形文化財（建造物）となり、2011（平成23）には文化庁の重要建造物公開活用事業により、大規模な改修が行われ現在の姿となった。

カラーLED 舞台照明など現代のテクノロジーを取り込み、楽屋の二階、三階部分にはライブ러리、資料室を設け、歴史の陰影が刻まれた建物にモダンな空間が対峙する能楽堂として生まれ変わった。

見所（客席）は、一階席、二階席ともに目の前に舞台がせまり、能の繊細な動きのみならず、能楽師の息遣いまでもがはっきりと伝わってくる。

現在は、ここを拠点として、「開かれた能楽堂」をコンセプトに、観世流の能楽の伝承だけでなく、初心者向けの公演、体験講座、現代アートとのコラボレーションや、環境問題をテーマにした新作能の創作、海外公演や次代を担う子供たちへの学校公演など能を「現代に生きる魅

力的な芸能」として普及・啓発する活動を精力的に行ない続けている。

650年に渡って連綿と続く能の歴史の中で、創設から戦災を越え90年以上に渡って、「今」の時代を生きぬきながら「大阪・谷町の能楽堂」として愛され守られてきた山本能楽堂。その歴史を創設者である山本博之の歩みとともにたどってみたいと思う。

2. 山本博之と観衛會舞台

2-1.山本博之のおいたち

山本家は信州山本城主、諏訪盛重に発するという。諏訪氏は鎌倉の重臣として栄えた家だが、永正年間（1500年ごろ）信州をたちのき、近江国野洲郡赤野井村に移り住んだ。

赤野井村は1623（元和9）年に成立して幕末まで存続した淀藩領で、そこで諏訪家は大庄屋をつとめ、代々農民の指導者となり、地方自治にも功績を残した。

この家は、現在も滋賀県守山市大家赤野井171に大庄屋諏訪家屋敷として残っている。

山本家の初代、七郎右衛門は元禄年間（1688-1704年ごろ）に京都へ出て、烏丸三条で伊勢屋と称する大名貸の両替商を営んだ。

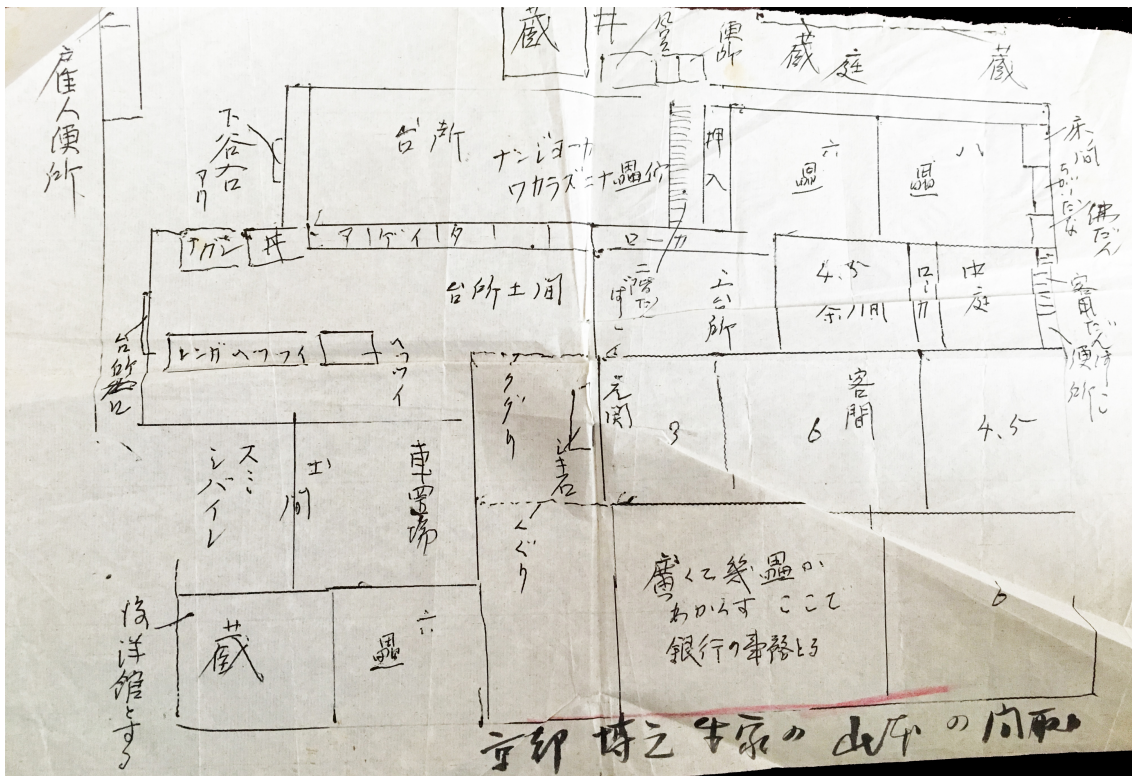
以降、代々京都にあつて、五大両替商の一つとして指折りの身代となり、長者番付にその名前が載るほどだった。

1850（嘉永3）年、東京遷都にあたっては、三井、下村、熊谷などともに資金を献納したことが、徳富蘇峰「明治維新史」に記されている。

また、祇園祭の鈴鹿山には、1718（享保3）年に山本家が寄贈した能面がご神体として今も使用されている。

山本博之の父、九代目弥太郎（雅号・天麗）は伊弥太貯蓄銀行を設立、エクイテーブル生命保険代理店を営み、長く京都市議会議員をつとめ、京都市電敷設などに尽力する。

家は実に、間口15、6間（約30m弱）、奥ゆき20間（約36m）、土蔵を四つも持ち、三条通りの一角がすべて山本家という大邸宅だった。



山本博之生家の間取り覚書（博之姉、稲田潮による）

そんな中、1895（明治28）年10月13日、京都市三条烏丸上ル西側で、山本博之は、山本弥太郎長男として出生。本名は13日生まれから重三郎と名付けられた。

母は、滋賀県蒲生郡日野町、正野玄三という薬種問屋の娘でコトという。

姉、潮（のちに稲田姓）、弟、富三、弥三次郎の兄弟がいた。

博之は幼少のころは体が弱く、ジフテリアなどで入院したこともあったが、日本初めての小学校といわれる龍池尋常小学校へ通い、「おぼんさん」（京都では大金持ちの坊ちゃんをそう呼ぶ）として何不自由ない暮らしを送っていた。

ところが2年生のとき、父・弥太郎が親友の保証人として裏判をし、その友人が行方をくらましたため銀行の取りつけにあい、家財の一切を差押えられてしまう。

生活が一転した、博之は学校を転々と替わり、ついに3年生の春、一家揃って大阪北久宝寺浪花橋西入ル南側へと移り住むこととなる。

博之は浪速小学校へと編入し、父・弥太郎は、母の実家、正野家の助けを借りて売薬商を営むかたわら、外国より仕入れた電気帯を売り、なんとか暮らしを立てたそうだ。

生活も困窮した上に、店には人を使い、女中も二人やとうなど京都の生活の延長だったので赤字つづきだったようである。

弥太郎が箒を持って表をはく姿を、のれん分けしてもらった元の奉公人がみて涙を流したという。

そんな中ではあったが、父・弥太郎は謡曲を嗜むことだけはやめることなく続け、博之はそんな父に謡曲の手ほどきを受けた。

毎月、玉造の寺で弁当、酒持参の同好者の会があり、13歳のとき「七騎落」の子方に初めて出て、その後、子方のあるたびに伴われていくことになる。

当時の梅若萬三郎、六郎の人気は相当なもので、本町橋東詰にあった博物場能楽堂へときどき能を見に行った。

商人にしたいと思っていた父・弥太郎の意に反して、能楽師を夢見るようになったのはこのころのことである。

2-2.能楽師・山本博之誕生

1907（明治40）年、博之13歳、高等科2年（当時、尋常科4年高等科4年だったので今でいう小学6年生）のころ、父・弥太郎は松屋町高麗橋南入ル西側ゴム屋の老舗を買い受けて、一家は転居する。

その後、店は京都時代に近江より来て丁稚奉公し、引き続き大阪の店に勤めていた堀市之助に譲り、自らは北久太郎町板屋橋南入ル西側一軒路地の土蔵つきの家へ移り、謡曲の指南を始めるが稽古人は少なかったようだ。

その年の3月、高等小学校を卒業した博之は、教師から優等生として三井物産からの求人に応じるように勧められるが、家計を助けるため、また父の商人になれとの意に従い本町の洋反物商伊藤新へ丁稚奉公に行く。

しかし、すぐに胃を悪くし、足にはれもののできたため、辞して堀市之助のゴム店を手伝うこととなる。

大阪市内の薬店にゴム製品や医療器を行商に行く仕事であったが、朝早くより注文を取りに走り、大きな荷物を積んで得意先を回り、夜更けまで商品の整理をし、毎月6、70円を父母に仕送りするという日々であった。当時の家計はもっぱら博之に頼っていたようである。

17才から22才までのこの時代が一番苦しかったと博之は振り返っている。

ゴム店自体の繁盛しているとはいえ、100円ほど収入のある月もあったが赤字続きであった。

「このご時世は資本のある人が勝つ、こんな事をしてはとても成功できない」と思った博之は、「芸は身を助ける、好きな謡曲で身を立てたい」と、忙しいなか謡本をしのばせて父の元をおとずれるが教えてもらえず、能楽師になりたいという願いはなかなか許されなかった。

しかし、観世元義師が、初めて大阪の三休橋北稽古場へ稽古に来られたときに挨拶に伺い、念

願叶って元義師に入門することができた。

1916（大正5）年、22歳ごろの夏、松尾神社奉納に元義師と多田嘉七師の「楠露」のトモを勤めたのが初舞台となる。

その後、同門の吉井司郎入営で、元義師のツレは博之が多く勤めることになる。

このころは若き博之にとって、人生の大きな節目となる時期であった。

家族も姉・潮が稲田家に嫁ぎ、弟・弥三次郎が病気のためこの世を去る。

父・弥三郎は、20人ほどに謡曲の指南をしていたが小遣い程度の収入にしかならず、生計の足りない分は博之から仕送りして生活していたが、もとより患っていた糖尿病に不養生がたたわり、52才の春、尿毒症にて倒れ、帰らぬ人となった。

これを機に博之は、ゴム店の仕事を退き、謡曲一本にて生活することを決心する。

元義師に指南を受けながら、父が稽古していた人々を引き継ぐと、南本町の家より農人橋北浜町へ転居し、弟・富三と母と三人で暮らし始める。

その後、北久宝寺町板屋橋西入露路内に転居すると、この家の二階に十畳ほどの舞台を作り、稽古や謡曲指南を続けた。

元義師を敬愛し、寒稽古のときには大阪から一ヶ月間通い続け熱心に励み、できたての京都丸太町舞台で朝早くから熱心に稽古をするので、元義師から寝られないと逆に小言をいわれるほどであった。

そして、1919（大正8）年12月14日、初シテ「経正」を勤める。

ところが翌年1920（大正9）年、1月27日。

敬愛する元義師が、肺炎で急逝する。

大阪博物場で博之らの催した藤本氏肝煎能研交会で「雲雀山」を勤めた矢先のことであった。

ここに博之は、父を失い、また師を失って、その悲しみは相当なもので声を上げて泣いた。

博之を特別に可愛がった元義師は「山本しっかり勉強せよ」と言い残して死んでいったそうである。

元義師の亡き後は、宗家元滋（のちに左近）師が毎月京都にこられることになり、博之も師事することとなる。

元滋師から初めてつけてもらったシテは大阪能楽研交会の「俊成忠度」であった。

その後、元滋師や京都観世舞台付き伊藤龍三郎氏にも認められ、能楽師として精力的に活動を始める。

当時の仲間に、杉浦義朗（のちに友雪）氏、藤井美蔭氏、後藤方貞氏、黒石長義氏、小林賢次（二郎）氏、吉井司郎氏などがいた。

1924（大正13）年、博之30歳の年、博之の社中であった原芳兵衛の世話で、牛田勝二郎氏の長女・富美子と結婚。このとき富美子は20歳であった。

翌年、観世左近師主宰により、大西信久氏と大阪春秋会を創立。

第一回は「芦刈」山本博之、「羽衣」大西信久、「熊坂」杉浦義朗、素謡「天鼓」御宗家、一調「三井寺」井上嘉一郎であった。

御宗家が住吉のニッソーレコードへ謡を録音に行くときには、大西信久氏といつもお供に行き、帰途「つるや」「はり半」などでの晚餐にお供するなど、元義師に続き左近師も博之を大変重用し、このころから博之の人気も上がっていくことになる。

2-3. 「観衛會舞台」建設

1925（大正14）年、長男・勝一（まさかず）、1927（昭和2）長女・多美子が生まれる。

北久宝寺町の家が、博之の結婚や長男、長女の誕生で手狭となったのを見かねて舞台を建てる話が持ち上がった。

そして、現在の大阪市東区徳井町一丁目に、「観衛會舞台（現・山本能楽堂）」設立に向けての動きが始まる。

父・弥太郎からの限定相続を欠席裁判で決定するが、本来は京都の有名な資産家ではあったがまだ借金が残っていたので2、30円程度のもの。

設立には社中の今中久吉氏、平松徳三郎氏、天野英雄氏、西浦作之助氏、谷口悌一氏、吉田久子氏、浅川又左エ門氏、亀井定次郎氏、太田巴川氏ら、そうそうたる船場の旦那衆が名を連ね尽力したようだ。

その後の能面、装束、家財などほとんどのものは、博之一代で買い整えた。

地鎮祭には画家でもある牛田勝二郎氏（妻・富美子の父）が祝文を読み、後にこれを掛軸にして記念し、舞台の鏡板も牛田素川（そせん：勝次郎の画号）氏の筆であった。

妻・富美子の手記に建物の様子が記されている。

昭和二年 長女 多美子出産 三週●（判読不能）月 東区徳井町へ住む 二階能舞台
見所五十名位 男子トイレ 書生部屋 待合室 謡けいこ場
三階は蔵替わり 京都時代の長持 タンス 正月用ぬり 花見用の重箱 其他書類 昔大名方に用立てしたので證文 家宝の画 書籍等あり
博之掛幅 系図は巻物にして保有しやすい様桐箱に収められた
横山大観 富山鉄斎（親類らしい） 基角の俳句短冊 鬼角ともいふらしい 有名人の書残っていたらしい

一階は洋室（応接室 勝一勉強部屋 洋タンス ストーブ等あり）

トイレ(二ツ) 一ツは水洗式

六帖(茶室風)庭に面している

六帖(納戸風)

台所 女中部屋 風呂 (井戸あり とてもよい水)

●● (判読不能) = 四帖位 (博之おそい時はこの部屋でスキヤキしていた)

其他二軒の住居買いとりいづれ息子の家と思っていたが戦後下の大きい舞台建てたので見所になった

11月16日には、二十四世観世宗家左近師をお迎えして舞台披きを行う。

宗家、博之、大槻文雪師、手塚亮太郎師、大西新三郎師、生一佐兵衛師などが出勤し、引き続いて十日間の素人会を催す盛大なものであった。

また、このころ舞鶴へ稽古に行き、波多野秀蔵(徹)を書生として連れて帰る。

京都の例会能には、毎会申し合わせにも出勤し、一度も休まず、東京例会にも年4、5回上京し、その度に左近師とは懇意に過ごしていたようだ。

上京すれば宗家は必ず偕楽園など何処か食事に連れて行って頂く。

明治座見物、花長でテンプラ、神楽坂、鎌倉への避暑に二三泊帯同し、その後葉山にできた別荘にも二、三回と歓待さる。

宗家もともに富士五湖から箱根、日光から十和田湖なども観光に訪れ、能にお供した場所は、山陰は米子、松江、九州は福岡、大分、広島、岡山、和歌山、名古屋など全国を回った。

多くの曲を宗家にお稽古してもらい大変目をかけられた。

そう記した博之は、このころのことを「得意の絶頂なり」と表現している。

3. 「観衛會舞台」時代と太平洋戦争

3-1. 「観衛會舞台」時代

観衛會舞台は、妻・富美子の手記にあるように、木造三階建ては現在と変わらないが、二階部分に能舞台があり、50名ほどの見所を備え、待合室や、謡の稽古部屋もあった。入り口に面して書生部屋があり、来客にすぐ対応できるように作られ、三階は蔵がわり、物置や物干しとして使い、一階を住居スペースだった。

トイレは戦前にしては珍しい自家水洗だったそうだ。

山本家の菩提寺は京都市三条大橋本詰北側正林寺で東本願寺系であるが、京都から大阪移住のとき佛壇を預けてあったが、徳井町にこの家を建てたこのとき、ようやくその佛壇を迎へ納め

ることができた。

能舞台を中心において建築したため、一階の住居スペースは日が当たらず薄暗かったようで、長時間家族が住居としても過ごす建物でありながらも舞台を優先にして建築する姿勢は、その後の改築においても変わらない姿勢である。

長男・勝一は3歳、長女・多美子は生まれて一月での引っ越しだったようで、前の家のことや引っ越しについてはほとんど覚えていないそうだ。

この家で、次男・修弘（1929（昭和4）年）、三男・真義（1931（昭和6）年）、次女・裕子（1933（昭和8）年）、三女・淳恵（1935（昭和10）年）、四男・順之（1938（昭和13）年）が生まれ、4男3女に博之の母も加えて、家族10人で暮らした。

当時の徳井町界限は商店の多いにぎやかな界限で、気にした博之は子供たちのほとんどを島之内の方が柄がいいからといって、東横堀川を越えた淡路町の汎愛小学校へと越境入学させた。

さすがに住居としては手狭になったのか、病気がちだった次男・修弘の養生のためもあり、一度は夙川に住み、順之が生まれるのと前後して現在の堺市西区上野芝に家を借りて住むことになる。

当時の上野芝は住宅地で、借りた家は庭も広く二階建て風呂のあるきれいな家で、すぐ近くに智恵の文殊、家原寺があった。

家の裏手すぐには上野芝幼稚園があり、子供たちは夏の朝早く、レコードが鳴ると起されてねむたい目をこすりながらラジオ体操をしていたようだ。

子供たちは、ここから朝六時半ころの電車に乗り大阪の学校へ通い、昼頃に帰る生活を送った。徳井町の家には留守番として家政婦を置き、たまに泊まる程度であったが、夏の間は上野芝にいても、冬になると週一度か、二週に一度くらいしか上野芝の家に行かなくなり、子供たちを汎愛小学校から上野芝の学校に転校させておけば、落ち着いたのではないかと博之は書いている。

このころ博之の名声はどんどん上がり、女中3人、書生は2-3人、書記1人、社中は増える一方で、田村家の親類ばかりで立派な会が一日できたほどだった。

収入も大卒で百円が高給だったときに千円以上の収入、まさに順風満帆、7人の子供、母、夫婦の大家族でずいぶん豊かな生活ができたようである。

しかし、やがてその恵まれた時代も終わりを迎え、観音會舞台は太平洋戦争の戦禍に巻き込まれていくことになる。

1937（昭和12）年2月、まるでこれから起こることの予兆のように、博之の母・コトが、大きなシェパード犬に飛びつかれ転倒し入院。手当の甲斐なく10月8日、亡くなってしまう。そして、その年の7月7日、中華事変が勃発。

ぞくぞくと病院に運び込まれる傷病兵のため、1930（昭和5）年以来、学生鑑賞能と教育

家招待能を催してきた能楽同志会で、しばしば「白衣の勇士（傷病兵）慰問能」を催した。

さらには2年後の1939（昭和14）年3月21日、恩師である観世左近師が急逝。

7月、職分に昇格するも、ついに第二次世界大戦が勃発する。

次男・修弘、骨髄炎を病み二年の入院生活と七回の手術を繰り返した。

博之、48歳の年である。

そして昭和16年（1941）12月8日、太平洋戦争勃発。

戦況は年々、苛烈になり、能会も催しにくくなるが、博之は終戦間際まで、鉄兜、巻ゲートルで出勤し、「一期一会」を旨に勤め続けた。

3-2.太平洋戦争中、能楽師としての活動

戦時下において芸術・文化が生き抜く方法を見つけるのは、いつの時代、どの国であっても難しい。

開戦直後、山本能楽堂で催された能会のプログラムに、観世宗家からの寄稿文がある。

そこに、この時代を能楽がどのようにして乗り越えたかが伺えるので引用したい。

拝啓 愈々（いよいよ）御清栄奉賀上候

偕（さて）今次の大東亜戦争は邦家として有史以来の大事態に直面し我々国民は一致協力して聖戦の目的間ついに努力する光栄を擔ひ申し候 然る所我が能楽謡曲は純粹なる日本芸術として古来政治家武人の間に嗜好され殊に陣中にあつても特にこれを演舞致候事實に鑑み当流より情報局に出頭させ時局下に於ける能楽謡曲に対する当局の御意向をお尋ね仕候所

能楽謡曲は日本精神を具顯する古典芸術として国民の士気を鼓舞す健全娛樂なるを以てこの時局下に於いて能楽師は職域奉公の至誠を捧げ銃後国民精神の信仰に尽くし以て国家に寄与すべし

との御達示を蒙り有之我々職分の責務の重大を認識せしめるものに御座候すでに当局より奨励御言葉を受け候上は能楽謡曲をただに銃後健全娛樂たるに止まらしめず、すすんで肇國以来の大精神に則り国民の修養機関の一たる覚悟を以て能謡報告に一路邁進致すべきものと存じ候間当流職分師範は固より一般趣味者に於かれてもこの主旨に基づき多いに唄い且舞ひ長期戦に対応すべく沈着にして剛腹の氣を養ひ堅忍不拔隱忍持久の精神を根本とし輕佻華美を排し自肅自戒して大東亜永遠の平和達成に翼賛の誠を致されん事を切望致候慈に右の主旨を通達申上候
敬具

観世宗家

昭和 17 年 2 月 1 日 山本観衛會社 プログラム

江戸時代、幕府の式楽として保護され武士の身分を許された能楽は、明治以降一度は崩壊の危機を迎え近代化を余儀なくされるが、ここにきてまた戦時下の国民の精神を鼓舞する芸術として認められることになる。

この観世宗家の言葉が、危機を凌ぐための方便であったのか、そうでなかったのかはわからない。

博之も、ただ「能を勤める」という意味においては、この言葉に従い、戦前と変わることなく黙々と勤め続け「能とはこんなによいものか。秀吉が陣中で舞ったのも無理がないと思う」という言葉を残している。

1944（昭和19）年、戦局はいよいよ日本に不利になると、大阪にはアメリカ軍の空爆が相次ぎ、3月、博之が徳井町に残り、妻・富美子と子供たちは奈良の初瀬に疎開する。

長男・勝一は、当時、関西大学の学生であったが、二年次になるや桜島の住友伸鋼所に通年動員として勤労奉仕に行くと伸鋼所の寮にて暮らし、ほとんど学校にはいかなかったようだ。

家族の疎開先は、富美子の兄の家庭教師をしていた人の紹介で、初瀬の興喜寺の山上にある家であったそうだ。

ここから毎週土曜日に大阪に戻り、月曜日朝早くに上町六丁目から初瀬にある学校に間に合うように帰る生活だったという。

富美子の手記によれば、疎開先は小屋のような家で、水は谷川まで汲みにいくのが日課、博之は堺の陸軍病院に「慰問能」に行くなどはするが、稽古はほとんどなく大した収入もなかった。

疎開先の町会は疎開者には温かい目をむけてくれず、よそ者として、くじで食糧があたっても「都会の人はぜいたくしてきたから、私たちがもらう」と取り上げられることもあったそうだ。

そして、1945（昭和20）年3月13日、大阪大空襲の日を迎える。

3-3.大阪大空襲

昭和20年3月13日夜。

その日、博之は前日の勤労奉仕で疲れていて、空襲警報も知らず、高射砲を打ち出す音で目覚めた。

徳井町には勝一、多美子、眞義の四人がいたが、勝一、眞義を叱るように起した。

「今日はいつもとは違う大編隊で大変だ」とは思ったが、その後の顛末はまったく予想してはいなかった。

徴用の関係で警防団に出ていたので、この日は非番だったが、下げ鞆にパンとウイスキーを入れて、中大江の警防団に行こうと警報発令後30分ぐらいして一度門外に出ると、もう焼夷弾

が雨と降っていた。

北新町、南新町、徳井町からも火の手が上り、5、6軒東の蓄音機屋の二階が燃え出し、家から梯子を持ち出して、バケツで屋根に上って消火するも、日頃訓練も怠っていたからうまく水がかからない。隣家のホースを持ち出すが、水が細くてとても駄目だった。

勝一、多美子が家に落ちた焼夷弾を消したり、近所の消火に走り回る中、突然、東隣の空家、貴志宅から炎が上り、二階の便所にホースをつけたがとても見込なく、あきらめて仏壇の掛け軸、置時計など手回り品、国民服を多美子に持たし、北大江公園へ行けと逃がした。

台所道具に不自由すると思いいリュックサックに鍋、包丁などをぎっしり詰め、茶の間で衣類や煙草を大きな鞆に入れた。

あたりはもうだいぶ煙くなっていて、下駄箱から出した靴を破った防空幕で包み、勝一を三輪車で天満方面に逃がし、博之は自転車で造幣局へと逃げた。

散り散りになってしまったが、北大江公園で多美子、眞義に落ち合い、なんとか勝一とも出会うことができる。

この大空襲で徳井町の舞台は全焼し、ともにたくさんの物が焼けた。

16日に仏壇、ラジオ、畳その他を初瀬に送るつもりでいた矢先のことであった。

座布団だけでも180枚、謡曲の参考書、全集もの、赤本、お茶の道具、花入、ラジオ（ビクター）、レコード、記録一切、番組など、着物、袴、下着、たんす、机など貴重なものも多かった。

「何より問題は今後如何に生べきかだ？」そう記す言葉に博之が途方に暮れる様子が伺える。一年前から初瀬に家を疎開していたことがせめてもの救いで、初瀬・與喜寺の六畳と四畳半に九人で移り住んだ。

田舎へ行けば野菜も豊富と思ったのは見込みちがいで、食糧はなく、子供も多く、今後の生活を危ぶまれ、今後、謡曲も続けるのは無理かと思っただが、戦火の中、阿倍野にあった門下の波多野氏の舞台が焼け残り、そこで稽古をし、各地の陸軍病院で稽古や傷病兵慰問能を続けることができた。

一時はこの舞台を買って、大阪に帰ろうかと考えたこともあった。

この時もたくさんの社中が、博之を支えてくれたようだ。

大阪大空襲直後の3月20日ごろ、京都丸太町にて左近師七回忌追善能があり出勤するが、ワキが来ず、地謡も一人も来ることができなかった。

片山博通師シテの「当麻」、博之ひとりでワキと地謡を勤めた。見所にはかろうじて5、6人の姿があるばかりであった。

やがて日本はマリアナで破れ、硫黄島が取られ、ドイツが降伏する。

B29は連日、本土九州へ空襲をしかけるようになる。

5月14日昼には、ついに初瀬の真上をも数百機の戦闘機が通りはじめ、もうここも危ないかもしれない、敵前上陸したらどうなるかなど考えを巡らすは答えなどではなかつた。

昭和20年5月25日未明、ついに電報が来て、勝一が6月1日第六十八部隊家島隊（イ）に入隊する。しかし、この日も大阪大空襲があり、隊に行くのに非常に難渋したようだ。

6月3日には東京大空襲があり、向山御宗家、大曲・高輪・橋岡・喜多舞台が焼失し、東京には多摩川の舞台のみが残った。

空襲はいよいよ激しくなり、初瀬にも陸軍病院別院ができて、あたりの様子は一変する。

興喜寺の庭も今に陸軍が伐木して使うのでないか、ここでは空襲でも安心して寝ているが敵前上陸すればどうなるだろうか。

当時、修弘、眞義、寿美子は交代で波多野宅を借りて住んでいたが、また沖縄から戦闘機が頻繁に来ることになれば、大阪に出かけることもできない将来を博之は憂れていた。

人の家に住まうことことは苦しみだと山本一家は問わず語らず体験したと妻・富美子は書いている。

6月5日には、神戸に住んでいた姉の稲田家も空襲にて焼ける。

「焼あとのけむりもうもうたる中をわざわざと国民服にゲートル、カバンかけて見舞に来て下さったその焼あとの前で博之さん持参の弁当を頂いて、親類なればこそ涙をながしてうれしく感じました。」稲田潮は手記に書いている。

大阪大空襲で焦土と化した大阪、あの大きな御堂の影も形もなく、電柱は折れ焼け線路はまがり人通りはほとんどなく、まだ本町通の北や南の焼あとの蔵より火がもえていた。

終戦までのわずかな期間、まるでカウントダウンのようにしたためた博之の手記があるので引用する。

六月七日には、徳井町の残りも全部戦災にあう。

今に皆、焼けた人が多くなると思う。沖縄も駄目なら、敵の上陸もあるだろう。

みんな焼けて人口五、六百万くらいにでもならぬと治まるまい。

八月六日 広島へ敵原子爆弾使用。おびただしき被害、三四キロ半程一物もナシという。

八月十日 この日は内田様でビールをよばれ、これが最後の宴かも知れぬ。

八月十二日 勝一休暇を貰い、帰ってくる。写真を写し寄書し、「楠露」謡ひ観音堂に参拝す。

八月十四日 全国的大空襲あり九日にまた長崎に原子爆弾使用、全市壊滅したと。芦屋川大空襲にて休む。電車も動かず。

八月十五日 正午、天皇陛下、放送あり、一層戦に努力せよとの事と推察したるに、意外、降伏の放送にて呆然とす。

併し国体護持なれば、能楽好い立場になると思ひホットする。今後如何にして生活して行くか、

前途不安の処だったので、小生としては甦生の思いだ。

今後どんな世中になるか、スイスの如きものになるか。目下の処、敵軍進駐後略奪暴行などあるかと皆憂慮。

京都は少しも空爆されなかったため、書物も焼けず衣装も全部そのまま稽古も続けられたようであったが、大阪で稽古を続けられた能楽師は博之一人であったらしい。

9月8日、長男・勝一が復員。

その秋、家族一同で大阪にもどり阿倍野、波多野邸に移り住んだ。

当時の徳井町の様子を、一門の八木康夫が記している。

昭和22年2月8日。シンガポールから四年半ぶりに復員してきた私が旧山本舞台の焼け跡に立った時は徳井町の通りでは、菱コマビルがポツンの焼け残り、ズット東の方谷町筋よりに旧町会長の市居様の御新宅、向側に吉田米商店と4、5軒がポツリポツリと建っているきりで此処が出征直前まで自分が育った処かと思うと暫し涙が止まりませんでした。

4. 山本能楽堂再建

4-1. 波多野家に身を寄せる

山本家は、戦後すぐ阿倍野にあった内弟子の波多野家に身を寄せ、敷舞台に一家9人が並んで寝る生活を送る。

戦争が終わり、天皇陛下から娯楽復興を急げとのお言葉をきき、博之は今後、能楽の立場はよくなると思いとてありがたく思ったようだ。

博之は、どこへも勤めることなく能楽師としての生活を貫き、それほど苦しい生活を送ることはなかったと、戦争中を振り返る。

食糧難の世の中にもかかわらず、舞台が焼け落ちてからも、稽古に行けばビールをいただいたり、慰問能に行けばタバコやビールなど嗜好品をいただくなどもてなされた。

毎年、能会も催すことができ、素人能を大阪では最後まで続けることができたのも、「此戦争中稽古をつづけて頂いた人々こそ恩人だと思ふ」と感謝して、稽古を続けた人々の名を手記に残している。

1946（昭和21）年には焦土と化した大阪で、「斯界の權威を招聘、春秋四回催し、最高の能楽を鑑賞芸事の向上を致すべく「山本能楽会」を興す。

毎回まさに能楽界の權威を大阪に呼び、毎回豪華な番組を組むことを信条としていた。

このころ「卒塔婆小町」「定家」「三輪（白式）」と大曲を次々と披き、生涯に渡ってこだわ

った「道成寺」を二度に渡って勤めるなど精力的に活動し続け、1947（昭和22）年の「江口」では大阪芸術祭賞を受賞する。

そして、瓦礫の山の中で、「もう一度谷町に能楽堂をつくりたい」という船場の旦那衆や市民の熱意によって、山本能楽堂が再建に向けて動き出すこととなる。

再建のために奔走した博之、富美子、勝一は阿倍野にはほとんどおらず、長姉の多美子が母がわりとなって幼い子供たちの世話をした。

4-2. 「山本能楽堂」建設

山本能楽堂が再建されたのは1950（昭和25）年。

1950（昭和25）年3月2日の朝日新聞の記事に「本格的な能舞台、大阪で4月に完成」という見出しで記事が掲載されている。

「能楽堂は戦災でその大半を失い、今年は東京の水道橋宝生能楽堂が落成する筈だが、それにさきがけて観世流の山本博之氏が東区徳井町の旧邸跡に復興した山本能楽堂がほぼ完成、四月下旬には落成式を挙げる予定で鏡板の松を能画の第一人者松野奏風画伯が腕をふるって仕上げている。舞台は、西本願寺黒書院の国宝舞台（桃山城の遺構）を写した方三間の本格舞台で鏡板の松も本願寺のものにならない根上り松が向かって右へのびているのと、一方の枝を切戸の上まで延ばしているのが普通と異なっている」

舞台抜きを目の前にした当時の能楽堂の息吹が伺える。戦後、全国に先がけた舞台復興であった。

建築は、浜田豊太郎氏。舞台は浜田氏が戦前より備蓄していた檜を駆使し、最高の資材で最高の宮大工の技巧を凝らし作られた。

山本能楽堂を訪れる人の中には「非常に美しい舞台である」と感動する人も多い。

しかし戦後の物資の乏しい中、能舞台以外の建物は古材や廃材を交え、当時手に入ったあり合わせの資材で人々の熱意と英知を集結して再建された。

焼失した能楽堂も、舞台を中心に立てられていたことを考えると、まず能を優先に考えた博之の思想がうかがえる。

また、先の記事にあるように、鏡板の松の絵が他の舞台より少し個性的で、これは画家の松野奏風が来たときには、すでに舞台に鏡板がはめ込まれていたことに起因する。

通常日本画を描くには床に倒して描くが、すでに大屋根まで葺いてあったので、鏡板は到底外すことができず、大いに苦心して描いたという。

中国や朝鮮から取り寄せていた松を描くための絵の具が、戦後手に入らず、あちこちからかき集め、泊り込んでの作業であったそう。

三男・眞義によれば、山本家の兄弟たちが内弟子でもあり書生でもあったので、早朝に起きて

建築現場の荒筵に座り声を鍛えたり、新築の舞台を少し離れた豆腐屋から豆腐のしぼり湯をもらいに行き、ぬか袋やおからなどで手分けして拭きこんだようである。

戦後の疲弊した経済貧困の世相のなかで不用心だったので、留守番に戸締りも不完全な仮住居に住み、夜、大工さんが帰ったあと、しんとした建築現場におがくずが風に吹かれる音や、新しい木の軋む音などに起き出し、懐中電灯で見回ることもあったようだ。

当時の富美子の日記には、その慌ただしさが、折に触れて記されている。

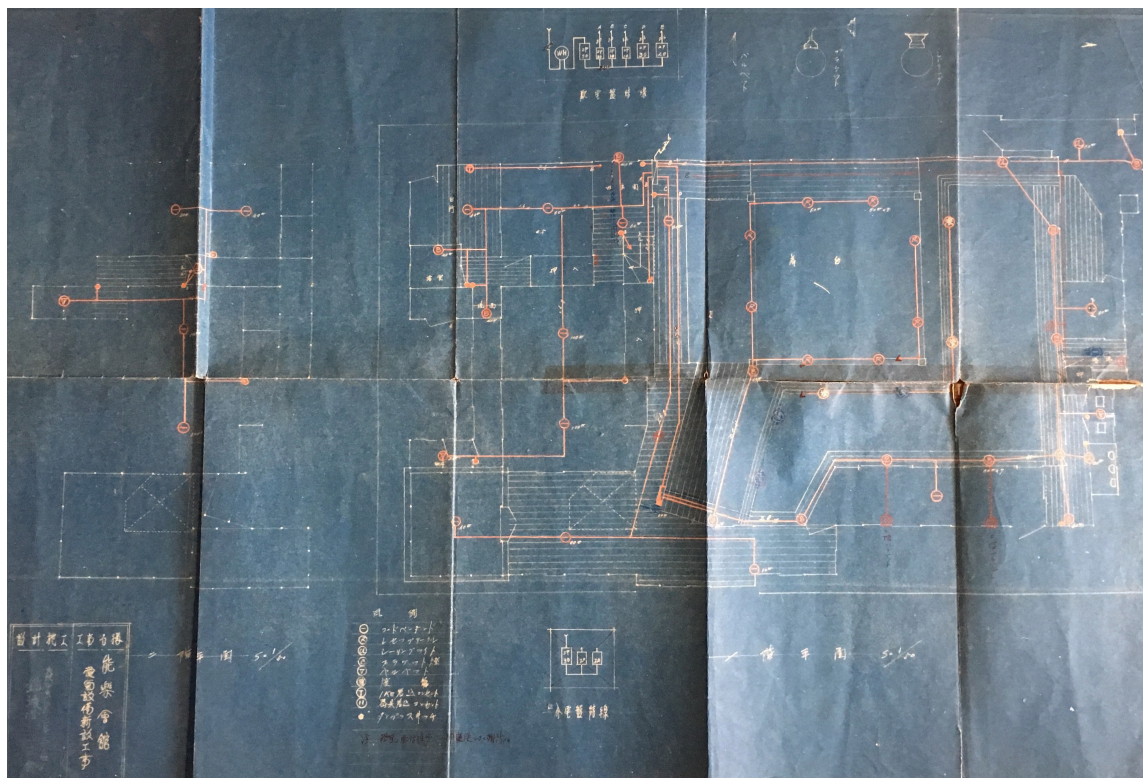
建築の資金のやりくりにはなかなか困り、それまでの保険かけ金や子供たちの積立すべてをつぎ込み、あちこちばらばらになった社中のお宅を一軒一軒訪ねてお願いして回ったようだ。

家族は阿倍野の波多野氏宅、興喜寺を行き来しながら別れて暮らし、食べものも簡単には手に入らない時代、大工のお昼の献立や、おやつなど考える日々であったようだ。

1949（昭和24）年8月の暑い夏の日、ところどころ焼けただれたビルの外には一面の焼け野原に広々とした野天で地鎮祭が行われた。

二間四方ばかりの板を敷いた上で、家族、一門の主だった人々で「神歌」を奉納。

通常は、土地の真ん中に青竹、しめ飾りで四方を囲った所に浄め砂を盛り、神主がお祓いして浄めるのが一般的だが、能楽堂の地鎮祭だから能楽式でという博之の発案で神主のお祓いはなく、「神歌」を謡って地主の神を鎮めるといふ他に類を見ない方法がとられたそうだ。



当時の間取りが電気配線図から伺える。

1950（昭和25）年4月26日、舞台披きは、二十五世観世宗家をはじめ京阪神の職分、三役の出演で5日間にわたり、盛大な会が続いた。

以下にその番組表を引用する。

山本能楽堂舞台披き

初日 昭和25年4月26日

「翁」観世元正 千歳 山本勝一

「高砂」片山九郎右衛門

「橋弁慶」梅若猶義 子方 山本順之

「羽衣」山本博之

「猩々」大槻十三

二日目

「翁」山本博之 千歳 山本真義

「嵐山」山本勝一 トモ 八木康夫

「箆」松浦利一

「花筐」春日宗正

「鞍馬天狗」波多野敏

三日目～五日目 素人能、謡

一日目、博之が「羽衣」を舞う最中に、大きな地震があり観客は雪崩をうって外へ飛び出すというハプニングもあったようだ。

その後、見所がせまくなり二階を増築。白州を設け、正面、ワキ正面に二階席、楽屋の庭には観世稲荷を勧請するなど、三回の改築を経てほぼ現在の形ができあがる。

構造上、大きな催しは無理だが、大阪の能楽界に果たした役割は小さくはなかった。

その大きさからいって、人数ものや大掛かりなものより、静かなしっとりとした曲になじむ舞台だと思うと四男で能楽師、順之はいう。

以下に、山本能楽堂舞台披三周年記念会に、鏡板を描いた松野奏風の寄稿文に当時の熱気をうかがい知ることができる。

博之が6度目となる「道成寺」を舞ったときのことである。

舞台披三周年記念別會能の記

松野奏風

定刻前からの観客で場内は満員。

「神歌」はシテ中村氏の朗調とツレ千歳山田氏的美調で芽出度く相すみ、「老松」春日良之氏の囃子、シテは例の腰の健実を示して、「苔のむすまで」の型も立派。

「正尊」となり、舞台一杯の登場。ワキ高安流家元、弁慶として大いに努め、文字通りシテを引立てツレ義経千崎氏の前に据える。この一曲の中心たる起請文は、シテ波多野氏の如き豊富な声調を以てこそ謡ひ得る所、いはゆる三読物の中で特殊の凄まじさを含蓄させて「身の毛もよだちて」の一句は遠慮して謡はずも効果は十分。令息の静御前可憐に舞ふ。後シテは貫禄堂々、床几にかけた姿も豪遊の将と見えた。橋掛りに立並ぶ手勢の意気組も結構。両軍の切組もまた満点。真義君の姉和美事に仏倒れして観客を驚かす。縄取に引立てられシテの引込みは、逆に押し戻しその勢で、観衆は大喜びのあと、千崎氏これをしっかりと見込みトメル。山本一門も之程に人数の必要の能ができることになったのは慶賀に堪えない。なほ此の正尊は、将来波多野氏の十八番曲となるべき能柄である。

狂言「靱猿」はシテ大名の茂山弥五郎氏の名演。猿舞となってお客もキャッキヤと喜び、場内笑ひに満たされる。順之、勝一、隆司それぞれの仕舞は頼母しく、素謡「蟬丸」は役揃いに見所大いに堪能する。大槻氏の「笠之段」仕舞大家の風格を合点させ、そのあと小生の漫談一くさり、少々時間を食過ぎ見所はおまちかねのカネとなる。

この舞台も建設萬三年、いよいよ鐘が持出され、吊られるに到ったのは祝着至極である。その鐘が無事に吊られて先づ安心。ワキの名乗狂言のフレすみ、舞台も見所も水を打った様になる。見所の眼は幕へそそがれてシテを待つことしばし。シテは着付けも美しく、全場を悩殺せんずの風情山本博之氏これが六回目のよしながら何時も初演の緊張を示し、物着後の一ノ松より鐘へ十分の執心の目付、初めて幸流の小鼓を呼んでの乱拍子も気合一杯で、和歌も朗々の名調。急ノ舞はやはらかに扱って大家としての技術を流石にと思はしめた。ただ正面框に足が半分出た時は、こっちが思はず息を呑んだが、それだけ積極的に大きく舞ふことは、誰にも出来る所にあらず。

「春の夕暮来て見れば」の謡も息切れ一つ見せず、美事に鐘入り、見所はホッと解放される。さて赤頭緋の長袴の後シテ、縦横に舞台を活躍して鱗落し、柱巻きとキマリキマリ十二分に正に大盛りの御馳走、幾皿をかさね「鐘に向かってつく息は」は一ノ松で杖を抱え、斜に鐘入目付、これは中でも結構であった。地頭に梅若猶義氏、勝一、真義二君等を率いて、キリは堰を切ったる奔流の勢ひ、壮快とも凄絶とも、申分がなかった。

4-3.能楽師・山本博之

この後、山本能楽堂は長男・勝一へと引き継がれ、現在は三男・眞義の長男・章弘が当主を勤めている。

2011（平成23）年には、文化庁の重要建造物等公開活用事業により、国の初めてのモデル事業として、株式会社安井建築設計事務所の設計、graf のデザイン監修により、耐震補強工事を中心に、環境・衛生面の改善など大規模改修がおこなわれ現在の形となる。

このときにも、改修には多くの企業、市民の方々の力添えがあった。

能を愛する思いと、それを普及させたいという博之の願いが今の山本能楽堂を支えているといっても過言ではない。

本稿は、戦後までの山本能楽堂の設立の過程を博之の歩みを追うことをこととしたので、その後のことは稿を改めることになるが、最後に、能楽師、山本博之の人となり、また戦後の活動について、姉、稲田潮の手記を元に、簡単ではあるがまとめたいと思う。

なに不自由のない京都の豪商の家に生まれ、常にお供がつき、家が広く大きいため外で遊ぶことなどなかったような生活から、突然の没落という逆境。

それほど体も強くないという幼少期を過ごし、高等小学校卒業後は、ゴム店の手代として家計を支える生活。

芸道への精進の姿勢だけではない忍耐強さや社交性、円満な常識など、後に観世左近師の信任を深め、門下を尊敬や社中の好感を集める、博之の性質はこの時に鍛えられた。

ゴム店の手伝いをして、朝早くより夜おそくまで薬屋をまわっていたころ「あんたが来たら何か一品でも注文せんとあかん、ようがんばりやだ」と店々でいられていたようだ。

そしてそのときも謡本をいつも懐に入れて回っているほど、謡曲を愛していた。

そのせいか念願叶って、観世元義師に弟子入りし、一年ほどの間に驚くほどよい声が出るようになったようである。

博之は、便所へ行く間も謡本をもっていくほど、寸暇を惜しんで修行していた。

稽古から家に帰ってもまた飛び回る稽古を繰り返し、遂にお隣りの老夫妻が怒り、南本町の家を出る原因となってしまったという。

母コトを、若いときの苦労を思って、とても大切にし、亡くなった後も年回毎に丁重な法事を催し、朝晩仏壇に手を合わせ、どんなに遅く帰っても欠かしたことはなかった。

芸についてはとても熱心で、御宗家の「石橋」に、医師から出演を止められたにも関わらず、芸に死なば本望と出演し、終るなり玄関で倒れ大さわぎとなったこともあった。

御堂會館にて「三輪」白式を勤めるころには、関西の重鎮と書かれるほどまでになり、その声は老いても益々丸く、稽古にはとても熱心で真剣に取り組み、芸に対してへつらったり、いい加減なことは絶対に許さず、素人弟子の稽古の方々も真面目で上達していった。

自分の弟子や同門については、心くばりも厚く、憐れみが深く、宗家や同輩の方に対しても礼をつくし、驕ることはなかった。

六十才を過ぎても皮膚はつやつやとして若人のごとく、精力的で逆に若い人たちが追い立てられるほどだったらしい。

寸暇を惜しんで芸のことを考える姿勢は、老いても変わることなく、電車に乗ってもすぐ小さい謡本を見、立っているときは仕舞の型を考えていた。

「ただ芸、芸の外なし」

徳井町が戦災にあい、初瀬に疎開していたとき博之は次のような手記を残している。

能楽は家柄が重要で、博之ほど無位より出世したものはない。

職分になると家元へ直接手紙が出せ、免状も直接に届けられるようになる。

無位の博之が一躍、左近先生に引立てられてこの地位までになるまでには随分と苦労があった。芸に生れたものは芸の外になにが出来やう、出来なくともよし、芸に死にたいものだ。

勝一、修弘、眞義、順之、みな自分の長所を心得て其方に進んで成功してほしい。

ただ一人は芸をついでもらいたい。

観世家、能楽道に対しても、父博之が一代の仕事をやっと勝ち得た位置は、是非だれか一人でも二人でも続いて、来る平和の時代には再び能楽で盛にやるべし。

芸で行く事、又面白くなったり嫌になったりする事は嫌になった時こそ上達の一步手前。津せず努力すること。私は努力一本でやってきたのだ。一心に努力してやりぬくこと。

その努力が実を結び、大阪府芸術祭賞、フランス国立音楽舞踊アカデミー団体賞、二度の大阪文化祭賞、府民劇場賞、さらに1967（昭和42）年には「戦後舞台を最初に建設して、社会教育に貢献した功」とあって大阪府知事賞など受賞する。

1968（昭和43）年には勲五等双光旭日章を授与され、1970（昭和45）年、76歳にして「老後の初心忘るべからず」を旨として毎月、博之自身の会を設け、永眠する月まで舞い続けた。

そんな博之のことを四男・順之は「能好きの中の能好き」という。

特に「道成寺」を勤めることを大切にし、節目節目で勤め続けた。

その回数は10回に及び、弟子家でこれほど勤めることはなく、最後は自らが建てた山本能楽堂の舞台で勤め納めた。

晩年は腰が悪くなったが、座っても傾いてもやりたいといって舞台に立ち続けた。

1973（昭和48）年、79歳の12月「河村研能会」で舞う予定の「井筒」の申し合わせに参加。

「ちょうどいい位でした。気持ちよく謡えました」という言葉を残し、勤めることを楽しんでいたが、体に違和を感じそのまま入院し、15日、永眠した。

亡くなる二ヶ月前の10月6日、自身の定期能で勤めた「玄象」が最後の装束能となった。

翌年は、傘寿と金婚を祝して「三輪」を勤めることになっており、とても楽しんでいた矢先のことであった。

臨終2日前には、「千歳」を抜く予定になっていた現当主・章弘師の稽古をつけているつもりであったのだろうか、周りの人に「大小を持ってこい」と指示するほど、最期まで芸のことを思い、まさに「芸に生き芸に死ぬ」人生であった。

5. 終わりに

本稿は、大阪の能楽界に重要な役割を果たし続ける山本能楽堂の戦後までの歴史と、その設立に尽力した初代当主・山本博之の歩みを、残されていた本人の手記や当時の記録、関係者のインタビューをまとめたものである。

650年にわたって、受け継がれて来た能の歴史には、それを代々伝え続けて来た人たちだけではなく、こうして能に魅せられて自らその系譜の中に身を投じた人の物語もある。

その人生に訪れた転機のひとつひとつが、別の選択肢を選んでいれば、現在の大阪の能楽界は、また別の様相を呈していたかもしれない。まさに塞翁が馬。

もし、京都で生家が差し押さえられなければ、博之も社中のひとりとして謡曲を嗜み、能を支える人々のひとりとなっていたかもしれない。

大きな資本には対抗できないと考え、「芸は身を助くる」を信条に、人生を賭けて芸の道に飛び込んだことは、博之の時流を読む才覚に思える。

またそれが「大大阪」の豊かな時代に出会えたという幸運であろう。

しかし、いくら「芸は身を助くる」を信条にしていたといえども、能楽師として働きながら戦災を乗り越えることは並大抵のことではあるまい。

贅沢を禁じられ、滅私奉公を求められる時代において、芸術はとかく体制への礼賛を要求される。

それが「すぐに何の役にたつのか」に対する回答は、芸術の本質とは必ずしも一致しない。

このような時代を、本稿中に引用した観世宗家の言葉のように、能はたくましく生き延びる道をさがしたと思う。

芸術家として、本当に「銃後の支え」と思って舞い続けたかどうかは計り知れない。

かつて修羅道に落ちることを恐れる武士たちに、その魂の行方を舞ってみせた能。

戦禍のなか、彼らは何を思い舞台を勤めていたのであろうか。

さらには、敗戦の色が濃くなり生活が逼迫するなか、それを私財を投げ打って支えた大阪の町衆の力にも感嘆せざるをえない。

能楽堂や謡曲の稽古の場を支えて来たのは、この「文化的な社交場」を大切にす町衆の精神である。

一つの目的のためだけに形成された場ではなく、継続的に人と人とが自由に出会い交わる場があり、そこでまた新しい文化が生まれていく。

この「場」を大切にす感覚、そしてそれを自ら生み出していこうというのは、まさに町人の町、大阪ならではの文化なのではなかろうか。

その礎として能楽堂は支えられ続けてきたのであろう。

本稿は書き残された山本家に関する多くの手記をもとに、できるだけ忠実にその歩みを追おうとした。

ただ手記自体が、断片的に残されている部分もあり、完全に時系列が繋がらない部分もある。当時の世情などについての裏付けも不十分な点は多々ある。

だが、手記の整理と編集が主となり、大阪の歴史的変遷や地理的な調査も含めるところまではたどりつかなかった。

その点を補完して書くことができれば、昭和の大阪のある側面を浮き彫りにする資料になりうる。

最後に、貴重な時間を割いてインタビューに協力いただいた方々、資料の収集に尽力いただいた方々に感謝申し上げます。

6. 引用・参考資料

偲ぶ草 ～山本博之略年譜

山本能楽堂創立30周年を迎えて（昭和55年4月5日）

能楽堂創立三十周年を迎えるに当りて 山本勝一

憶い出 山本真賀

舞台のこと 山本順之

山本能楽堂の三十周年を迎えて 波多野徹

同期の桜 八木康夫

能楽堂建設懐古 矢野一馬

山本博之論 沼艸雨（「能楽界」昭和14年9月号）

山本博之手記（昭和20年7月6日 打出稽古場にて）

そのほか執筆時期不明の以下の方々の多数の手記

山本博之、山本多美子、山本勝一、山本修弘、山本眞義氏手記

※なお手記は、博之が初瀬に疎開のとき、書き置きしたものを姉・稲田潮が昭和36年5月に写したものである。

山本博之より眞義への手紙（昭和39年12月26日）

稲田潮手記（昭和36年5月27日）

山本富美子手記

富美子おいたちの記（執筆時期不明）

思い出の記（戦災後、初瀬にて）

日記（昭和25年ごろ）

百一歳十ヶ月最後の別れ

お稲荷さんを作ったきっかけの話（淳恵さんへの手紙）

博之のこと

稲田潮（博之姉）による京都の生家の間取り地図

山本観衛社プログラム（昭和17年2月1日）

山本観衛會五月催會稽古日表プログラム（昭和28年2月1日）

山本淳恵インタビュー（平成30年12月20日）

山本順之インタビュー（平成31年1月6日）

林慎一郎・編

山本能楽堂・監修